

ひとつのいのち

—その気付きのための理性(6)—

川崎医療短大 医用電子工学科
川崎医科大学名誉教授

中 川 定 明

(平成7年9月30日受理)

A Common Life of All the Living Things
—Reason for the Enlightenment of Itself— (6).

Sadaaki NAKAGAWA

*Professor Emeritus, Kawasaki Medical School
Kurashiki, 701-01, Japan*

(Received on September 30, 1995)

概 要

「ひとつのいのち」の続きとして、霊性の気付きについて記した。霊性は精神を超越して自分の中に実在するものである。それは臨死体験と同様に脳内に起こった霊的な現象ではあるが、決して超常的・オカルト的な現象ではない。自分の中に実在しているのに気が付かず、霊性が突然向こうから自分の中へやって来るような驚きを伴う。霊性に気付いた者は「神性・仏性」を知る。それは理性的な宗教の始まりである。

Abstract

As a series of "A common life of all the living things", Part 6, I intend to describe about the enlightenment of the spirituality. The spirituality exists in ourselves, above our soul. That is a spiritual phenomenon, like the so-called near-death experience. That is never a super-ordinary, mystical or occult phenomenon, and that is not available by a simple desire, but comes from elsewhere as an enlightenment, accompanied by an astonishment, when we have the longstanding want.

Once we have noticed the spirituality, we are introduced to the "God or Buddhahood". That is a beginning of reasonable religion.

心と物の二元的な対立を包んで、その奥に相即・相入するようになるには、
霊性の覚醒にまつよりほかない。——鈴木大拙——

I. 靈性

鈴木大拙師は「靈性は靈魂と紛れやすい。靈性は普通に精神とっているものと違うし靈魂とも違う。靈性は精神を超越して実在するものであり、靈魂は仮定のものである。」と記した¹⁾。『動物記』を書いたA. シートンは「レッドマンはすべての生命に内在する靈の理念を持っている。彼らに偶像崇拜はなく、宇宙には唯一の大靈が存在し、われわれはその分靈をもっているという。大靈が、雲・雨・山河・人間・動物・植物に宿り分靈として顕現していると信じている。」と『レッドマンのころ』²⁾に記した。レッドマンすなわち北米インディアンは太古にアジア大陸から移住したといわれるが、彼らは西部劇に出てくるような獯猛な民族ではなくて、心の優しい正直な人達であったことが、数十の文献に当たったシートンの記録から分る。興味深いのは彼らが偶像崇拜を持たなかったことである。彼らのいう大靈は、いわゆる「神」ではないから宗教のような信仰の対象ではなかった。大靈と、すべての生命に内在する分靈は、或る意味では紀元前二千年頃の古代インドの哲学・ヴェーダ学にあったブラフマン（梵）とアートマン（我）の關係に似た想念と考えられる。ヴェーダの聖典「ウパニシャッド（秘義）」では梵と我の合一が指向され、創造する神と造られる者、あるいは世界との二元論は否定された³⁾。アートマンは真実の自己であり純粹精神である。人は視覚、聴覚などによって対象を知覚し思考し認識する。認識は言葉と給合して意味をもつ。レッドマンのいう分靈やインド哲学のアートマンは精神とは違う。大拙師が靈性と表現したものと精神の違いもそれであって、このことを明らかにするのが本論文の目標である。

八世紀のヴェーダ学匠は「不生不滅のアートマンは、天の彼方に輝く最高実在であるブラフマンと合一する筈である。その合一を直観するには師匠や聖典の教え（秘義）を聴聞し、思惟し、瞑想すべきである」と説いた。それはレッドマンがいう「大靈が分靈になって顕現する」という理念と類似したアジア的信念である。ただし、インドの古代思想は観念的・神秘的で、ブラフマンは宇宙を創造する神通力を意味し、アートマン・真我を知ることによって、その力をうかがうことができるとし³⁾真我を知るには秘義を授かる必要があるとした。すなわち、師匠の面授を受けて思索すること、瞑想することが勧められた。これは現在のインドのヒンズー教にも生きている。ヒンズー教では師匠のことをグルといい、面授や修業の場所をアシュラムという。瞑想はヨガに含まれる。ヨガ（瑜珈）が中国仏教に伝わって座禅になったが、インドのヨガは本来は難行苦行である。たとえば、釘を打った板の上に寝たり、倒立姿勢を保ち続けたりする。ヘッセの作品に登場する瞑想や、白隠禅師の座禅は自力の修業であるから、梵我合一の悟りを会得できない多くの人の焦りと自殺をさえ招いた。

それでは、靈性の気付きはどうしたら得られるか。これは古今東西の人間が求めてきた課題である。靈性は外にあるのではない。自分の中に具わっている。靈性とは無限無辺の実在である神性（仏性）を感得するはたらきである。昔から聖人達は「汝自身を知れ」と言ってきた。道元禅師は「只管打座・何も考えずにひたすらに座禅せよ」と説いた。それは観察のまなこを自分の心身に向けることであった。「仏道をなろうというのは、おのれをなろうなり。おのれをな

らうというは、おのれを忘れるなり。おのれを忘れるというは万法に証せられるなり。」と『正法眼蔵』に残した。自分とは、何万とも知れない真理（万法）によって生かされている微小な存在であると同時に宇宙に匹敵する偉大な存在であることに、ふと気が付くことである。靈性は掴まえようとして会得できるものではない。しかし真剣に、根気強く求めなければ見付からないで、ある日、突然にやって来るものである。前報の最後に付記したタゴールの言葉「大きい事実が、私どもの内部に向こうから送ってくるメッセージを受けたときのよろこびによって、自分のうちで無限の實在に触れるのである。」は、短い言葉で靈性の特長を掴んでいる。釈迦は骨と皮になった苦行の果てに難行の無意味さを知り、それを放擲して山を降りたとき、卒然として「これ有るによりて、これ有り。これ無きによりて、これ無し」という単純明快な「縁起」の道理を悟られたという。こうして釈迦によって開かれた仏教は、本来は理性的であった。

靈性という言葉は如何にもオカルト的な響きを持つが、それは巫女の“トランス的精神状態”ではなく、まして超常的オカルト的な精神状態でもない。靈性を持つと世界が急に明るくなって、対象がはっきり見えるようになる。野球のバッターが、投手の投げる球が良く見えるようになるのと似ている。親しい女性の興味深い体験を聞いた。彼女は、十年間も求め続けた揚句、ある日突然目の前が明るくなって心身が抜けるような安堵感を覚えた。そのとき躍るような悦楽をおぼえた。チューリップが一斉に笑っていると見えた。また、デパートの或るフロアで、買い物をしている沢山の客、一人ひとりの動作がスローモーション画像のようにゆっくりと動くのが見えたという。彼女はその瞬間、非常に広い範囲を一目で見極めることができたのである。筆者の師匠は、突然心が明るくなった自身の体験から、それを「夜明けする」と表現された。そのとき自分に具わった独自の尊厳の自覚が湧いてくると同時に、宇宙の微塵にも等しい自分の卑小さも分かるようになる。それは「闇が晴れる」ような驚きを伴い、靈性というものが確かに存在して、向こうから自分の中へやって来るという実感が起こる。そして生命の永遠性を感得する。法華経を信じた宮沢賢治は、「わたしは宇宙の微塵となっていていつまでも生きている」と書き残した。

II. 臨死体験

女医キューブラー・ロスが『死ぬ瞬間』⁴⁾を書いて「死後の世界」という東洋・西洋に共通の古い想念を現代に再生させた。この想念は彼女が集めた沢山の臨死例の「体外離脱経験」に由来する。「ウパニシアッド」にも、人が死に直面したときアートマンは離脱して新たな母胎に宿り別の身体になると記されている。この「輪廻転生」の考えが現代のアメリカで流行している。当代一流の評論家立花 隆は、膨大な『臨死体験』二冊⁵⁾を書いて徹底的に臨死体験を検証した。それによると、臨死体験は民族によって違い、それは宗教の違いに由来すると考えた。インド人とアメリカ人に共通するのは、光りまたは宗教的存在に会うこと、人生のパノラマ的回顧その他がある。インド人に特有の臨死体験は、帳簿をもった男（閻魔）の前へ出頭することである。また体外離脱はインド人には無かったという。日本人にも臨死体験としての体外離脱

はない。臨死体験者がしばしば花畑を見て綺麗だというのは日本人に独特である。筆者の祖母もその一人であった。現存者や故人との出会いは三国に共通している。臨死体験が起こる説明としては二つの説がある。第一は「脳内現象説」で、酸素不足や炭酸ガス過剰が側頭葉に作用してエンドルフィンが脳内に産生され、様々な認識を生み、安楽感を起こすという説である。養老孟司も⁷⁾「脳の酸素分圧とエンドルフィン濃度の関係を調べると、酸素分圧が低いほど(臨死状態)エンドルフィン濃度は高くなる。」といった。第二の説は「現実体験説」である。そのとき人は、臨死体験の先は「死後の世界」へ一歩足を踏み入れた体験だったと思う。その体験に苦しみはなく、喜びに包まれ、死後の世界は神々しい光りに包まれるというが、これはクリスチャン特有の体験でありキリスト教の影響が明らかであるという。裸になって、硫酸マグネシウムの水溶液を張った長方形の小型タンク内に浮かび、周囲と隔離された真暗闇の無ストレス状態に置かれると、やがて臨死体験に似て身体が無くなって意識だけで存在するような状態になるという。立花 隆は自らそれを体験して、結論として脳内現象説にも現実体験説にも賛成・反対を明言できないとして、「臨死体験者が異口同音に死ぬのが怖くなくなった。生きるということ、とても大切にするようになったというのを聞くと、自分がどちらが正しいかを探り続けたことが愚かなことであったと知った。」と書いた。これは、合理的解釈を通してきた彼にしては珍しい結論であるが、臨死体験の問題はそれほど理解の難しいことなのだろう。キューブラー・ロスも科学者らしくない「死後の世界」の存在を想定したが、それは超常的・オカルト的な世界としてではない。理性とは、現代科学独特の合理性だという考えは理性的ではないと思う。西欧の現代科学は、合理性だけが理性だと信じている。そして、還元主義に立って際限もない分析を競い続け、その果ては心(精神)と物(物質)を対峙させる相剋を免れない。尤も次項に記すように、近年はその反省に立った「脳科学」が生まれてきた。筆者は臨死体験を脳内に起こった霊的な現象であるとは思いますが、超常的・オカルト的な現象ではないと考える。

III. 心身一元

西洋医学では近年、アセチルコリン、ノルアドレナリン、GABAのほかに神経伝達物質や神経調節ホルモンが多数発見され、脳および脳下垂体で産生されるそれらのホルモンは現在60種近くも調べられている。たとえば、エンドルフィン、インスリン、甲状腺放出ホルモン、ガストリン、ドーパミン、セロトニン、成長ホルモン、ソマトスタチン、プロラクチン、メラトニンその他である。こうして、脳はホルモン産生臓器と見做されるようになった。また最近10年間に、脳および脳下垂体の調節ホルモンが脳以外の器官に見出されるようになり、脳で作られる多数のホルモンが、特に消化管と性腺その他で証明されている。ホルモンは思考や感情に影響を及ぼすこともわかった。そこで、いろんな細胞が「こころ」の居場所ないし「こころ」を調節するとさえ考えられるようになった⁸⁾。1987年度ノーベル生理学・医学賞を受けた利根川進博士⁹⁾は、免疫と脳・神経系の関係を考えている。たとえば下垂体で作られるホルモンの一つ

がリンパ球で作られるホルモン様物質と同一であることが分かってきて、免疫系のネットワークシステムと脳・神経系のそれとの相似性に注目している。博士の仕事は、突然変異や遺伝子組み換えによって生物の進化が起こる系統発生上の出来事が、免疫系では正常な個体発生中または発育の過程で起きていることを発見したところに大きい意義があった。免疫系ネットワーク内の、かなり自由な突然変異や遺伝子組み換えがあるからこそ、生物は多様な異物の侵入に対して多様な抗体を作って対応できる。免疫系は最も進化の進んだヒトに到って、その複雑なネットワークシステムを完備した。この進化は或る種の記録機能によると想定されている。

脳や膀胱を持たない単細胞生物、たとえばゾウリムシもインスリンを作っていることが分かってきた。それでは無核細胞、たとえば細菌や、最も古い生物であるウイルスはどうであろうか。寡聞な筆者はその報告を知らない。しかし、際限のない薬剤耐性菌の出現やウイルスの変異、さらに遺伝子の転座がどうして起こり、生物の進化がどうして起こるかの疑問は未だ解明されていない。想像をたくましくすれば、マクロファージやリンパ球が異物情報の記録をするように、微小生物細胞の形質が記録を刻む働きをしているとは考えられないか。つまりウイルスに似た原始生物に始まって、無核細胞から有核単細胞、多細胞生物へ進化するすべての細胞の記憶がRNAに刻みこまれ、それがDNAのプログラムに受け継がれて、生きとし生けるものの進化が起こってきたと推定できないか。そう考えないと、地球上で約20億年を掛けて500万種に達した生物の多様性と、それらの合目的的な生態が理解できない。

こう考えたとき「仏道をなろうというのは、おのれをなろうなり。おのれをなろうというのはおのれを忘れるなり。おのれを忘れるというのは万法に証せられるなり。」と道元が記した洞察が分かるのである。そういう仏道（神性）を認識できる理性を靈性と名付けたい。前回、西田幾太郎の言葉「神性は哲学上の議論ではなくて心霊的経験の事実である⁸⁾」を引用したのは、筆者に於ける「靈性」または「回心」の体験に由来する。

文 献

- 1) 鈴木大拙：日本的靈性。岩波文庫。
- 2) A. シートン & J. シートン（近藤千雄訳）：レッドマンのころ。北沢図書出版，東京，1993。
- 3) 辻 直四郎：ウパニシアッド。講談社学術文庫，東京，1990。
- 4) キューブラー・ロス：『死ぬ瞬間』。読売新聞社，東京，1971。
- 5) 立花 隆：臨死体験。文芸春秋社，東京，1994。
- 6) 伊藤真次：脳のホルモンとこころ。朝倉書店，東京，1991。
- 7) 利根川 進，立花 隆：精神と物質。文芸春秋社，東京，1990。
- 8) 西田幾太郎：善の研究(39刷)。岩波文庫，岩波書店，東京，1970。